

「徳島の子どもの学力向上及び 生活習慣・学習習慣等の改善を目指して」

-知・徳・体の調和のとれた児童生徒の育成に向けて-

徳島県教育委員会

はじめに

本県では、平成20年3月に「徳島県学校改善支援プラン」を策定し、学力調査結果を集計・分析できるソフトウェアや学習教材の開発・提供、学力向上フォーラムの開催とともに、各学校における検証改善サイクルの確立による学力向上に向けた取組を支援してきた。

その結果、平成21年度の全国学力・学習状況調査結果では、小学校算数と中学校国語の「活用」に関する問題以外は全国平均以上となるなど、これまでの取組の成果が現れてきている。しかしながら、学力の面では、依然として「活用する力」に課題がある。また、学習習慣・生活習慣の面では、主体的に学習する態度や人とかかわる態度の育成に課題が残されており、学力との相関関係が明らかとなっているこれらの課題も併せて改善することが課題となった。

今年度、本事業の趣旨に基づき、県内各学校の「活用する力」の育成に向けた取組を支援するとともに、知・徳・体の調和のとれた児童生徒の育成に関する調査研究を推進し、その成果の普及を図った。

I. 徳島県教育委員会における取組

1. 事業内容について

(1) 事業概要

本事業では、次の2点について取組を推進した。

① 習得した知識・技能を活用する力を

育成するための、県内各学校の取組に対する支援

(ア) アクションプラン推進協議会の開催

本調査研究の推進に際し、アクションプランの策定、本県全体の取組、調査研究推進校の取組について、協議・決定・指導助言を行うとともに、研究の成果を普及するためのフォーラムを開催した。

(イ) 徳島県教育委員会及び徳島県立総合教育センターによる取組

a 徳島県学カステップアップテストの実施

身に付けた知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等についての定着状況を把握し、授業の検証改善を図るとともに、各学校における指導方法等の工夫改善を図るために、徳島県学カステップアップテストを実施した。

b 徳島県版全国学力・学習状況調査結果活用分析ソフトウェアの提供

徳島県学カステップアップテストの調査結果を各校で処理し、児童生徒の学力の分析と指導の改善ができるように本県独自の分析ソフトウェアを提供した。今年度は「全国学力・学習状況調査」が抽出調査となったため、希望利用校もその結果を分析して授業改善に生かせるように、活用に関する問題について集計・分析できる機能を持たせた。

c 学力向上推進員研修会の充実

本県の全小中学校に1名指名している学力向上推進員に対する研修会を年間2回開催し、言語活動の充実を図った指導方法や学力調査の分析ソフトウェアの説明、徳島県学力ステップアップテストの課題の提示、実施後の結果や改善のポイント等について協議を行った。

d 平成22年度全国学力・学習状況調査結果及び分析等の発信

今年度の調査結果と授業改善のポイントを徳島県立総合教育センターのホームページに掲載し、すべての学校の授業改善に資するよう支援した。

② 児童生徒の自主性・主体性の育成及び知・徳・体の調和のとれた児童生徒の育成に取り組む推進地区・推進校を指定した調査研究の実施と、その成果の普及

(ア) 「阿波っ子すだち（巣立ち）宣言」プロジェクトの実施

各学校において、児童生徒自身が自分たちの生活や学習を振り返り、一年間の目標を立て、その実現のために自主的・主体的に取り組む機会を持つとともに、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力をバランスよく育てることを目指し実施した。

(イ) 学校独自の「家庭学習の手引」作成の推進

児童生徒の自主的な家庭学習習慣の定着を目指して、各学校の実態に即した「家庭学習の手引」が作成できるよう支援した。

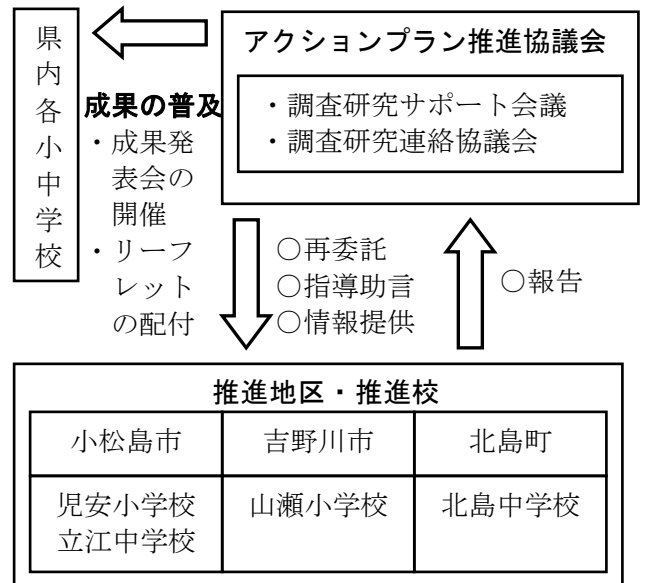
(ウ) 読書の生活化プロジェクトⅡの実施

児童生徒の自主的な読書習慣の定着を目指して、学校による「家でも本読む子どもの育成」を推進した。

(2) 実施体制

全国学力・学習状況調査等の結果から明らかになった学力及び学習状況等の課題の

改善に向けて意欲的な小松島市・吉野川市・北島町の2小学校・2中学校を調査研究校として選定し、実践研究を推進した。



(3) 研究成果

① 習得した知識・技能を活用する力を育成するための取組

(ア) 「全国学力・学習状況調査」の希望利用校においても、本県独自の分析ソフトウェアを用いて、活用に関する問題についての集計・分析を行い、その結果を指導や授業改善に活用することができた。

(イ) 学力向上推進員に対する研修会を6月と3月に開催し、言語活動の充実を図るための指導方法や徳島県学力ステップアップテストの課題の提示、実施後の結果や改善のポイント等について、小中学校別の部会に分かれ協議を深めるとともに、各校において研修の成果を校内研修等を通じて課題改善に向けた取組に取り入れることができた。

(ウ) 平成22年度全国学力・学習状況調査結果及び分析等の結果と授業改善のポイントを徳島県立総合教育センターのホームページに掲載し、すべての学校の授業改善に資するよう支援し、必要に応じて各学校が活用することができた。

② 自主性・主体性の育成及び知・徳・体の調和のとれた児童生徒の育成に向けた取組

- (ア) 「阿波っ子すだち（巣立ち）宣言」プロジェクトを実施し、調査研究推進校における学校・家庭・地域の連携を密に図った教育活動の推進を、他校の取組の改善に役立てることができた。
- (イ) 「家庭学習の手引」の作成を支援し、児童生徒の自主的な家庭学習習慣の定着に向けた取組を進めることができた。
- (ウ) 読書の生活化プロジェクトⅡの実施により、児童生徒の自主的な読書習慣の定着を目指した活動を行うことができた。

2. 普及啓発と今後の取組について

(1) 成果の普及啓発に関する取組

① 調査研究成果報告会の開催

調査研究成果報告会として、県内のすべての小中学校を対象とした「阿波っ子すだち（巣立ち）フォーラム」を開催し、調査研究推進校における成果を広く普及した。

② リーフレットの作成及び配付

調査研究推進校4校の取組をわかりやすくまとめたリーフレットを作成し、すべての市町村教育委員会及び小中学校に配付した。

(2) 来年度以降の取組

本調査研究による推進校の取組の成果を踏まえて、習得した知識・技能を活用する力を育成するための取組を推進するとともに、徳島県内すべての公立小中学校において「阿波っ子すだち（巣立ち）宣言」プロジェクトを一層推進し、知・徳・体の調和のとれた児童生徒の育成に向けた取組を支援することとしている。

Ⅱ. 推進校における取組事例

取組事例①

「『知』おすすめの本をふやします
『徳』あいさつでよろこんでくれる人をふやします
『体』給食で完食できる日をふやします」

小松島市児安小学校

(1) 学校の状況について

本校の校区は、小松島市の西よりに位置し、西に勝浦川をひかえ、肥沃な土地の農業地帯が広がっている。校区の北東部を通る国道55号線付近からは、商用施設や病院、住宅地が広がりつつある。住民は全般に教育熱心で、学校の教育活動にも協力的である。

本校は全7学級、児童数183名の小規模校である。本校の児童は、ここ数年の全国学力・学習状況調査等の結果から、読解力に不十分な面がみられることが明らかになっている。また、望ましいあいさつや食事といった生活習慣面で改善の余地がみられる。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

本校では、次のように阿波っ子すだち（巣立ち）宣言を行い、全校で取り組むこととした。

- ・「知」おすすめの本をふやします
- ・「徳」あいさつでよろこんでくれる人をふやします
- ・「体」給食で完食できる日をふやします

宣言は、学校長が朝会で主旨説明を行い、大判プリンタで印刷して掲示した。

①取組内容

取組を進めるにあたっては、宣言文を作成後、児童が自主的・主体的に取り組

みながら社会とも関わろうとするために、次のような点に配慮した。

- ・児童の実態を客観的資料に基づいて把握・整理・分析し、児童自身が、楽しさや喜びを持つ。
- ・地域や保護者、関係諸機関との連携を図る。
- ・「知」領域では、たくさんの本にふれるなかで、「自分自身のおすすめ本」を見つける。
- ・「徳」領域では、人と人との心が通じ合うあいさつができるよう、日常生活のなかで、学校内外の大人たちから賞賛される機会を増やす。
- ・「体」領域では、食の大切さを知り、嫌いなものを減らす努力をする。

②「知」領域での取組

(ア) 朝の読み聞かせ

本校では、数年前より学力向上策の一環として、朝の活動の時間に、保護者・地域ボランティアの協力のもと、学級ごとに月1回の読み聞かせを行っている。読み聞かせの前に本に込めた思いや、図書館の紹介などをしてくださるボランティアの方もおり、児童も毎回目を輝かせながら話を聞いている。また朝の活動の時間には、上学年の児童が下学年の児童に読み聞かせも行っている。【写真1】

読み聞かせる児童は、相手意識を持ちながら本を選んだり、読み聞かせをしたりすることができつつある。【写真1 児童の読み聞かせ】

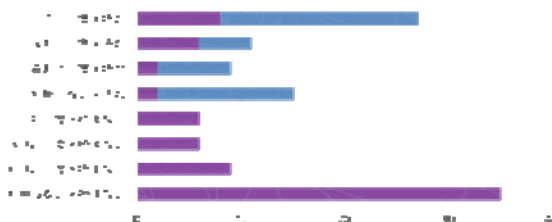


また、受け手である低学年の児童の中には、家庭で幼い弟に読み聞かせを始める等の事例も見られるようになってきている。

(イ) 児童の取組と保護者・地域との連携

全保護者を対象としたアンケート結果によると、市立図書館貸出カードを

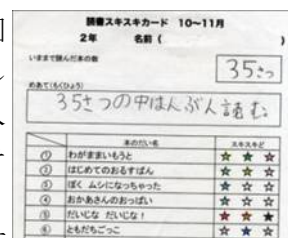
持っていても、家庭読書が少ない場合が目立つことや、月一度程度、市立図書館を利用している場合は家庭読書も多く、市立図書館を利用していない場合は家庭読書が少ないことなどが明らかになった。【グラフ1】



【グラフ1 「図書館利用頻度と家庭読書の関係」調査結果 2010年7月 児安小学校全保護者対象】

そこで9月から、市立図書館の学校を対象とした貸出制度を利用し、毎月全校一斉に図書を借り、市立図書館の蔵書を学級で読むことにした。具体的には、市立図書館の協力を得、主に各担任が事前に要望した図書を準備していただき、毎月、本校児童数分の図書の貸出を受けることにした。

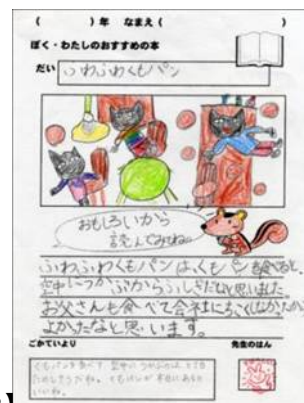
貸出を受けた図書の読書記録として、児童一人一人が「読書スキスキカード」【図1】に1冊ごとのおす



【図1 読書スキスキカード】

すめ度を記すことにした。読書スキスキカードを作るにあたっては、めあてや振り返りを記録しやすいこと、児童の負担になりにくいこと、おすすめ度を分かりやすく記録できること、集計しやすいこと、家庭との連携を図ること等に留意した。

11月と2月には、1冊をおすすめの本として選び、本の紹介や感想等を記して、家庭に持ち帰った。【図2】



【図2 おすすめ本の紹介例】

保護者からは、「家族で読書について語り合う機会になった。」「子どもの読書量が増え、子どもがどのような本を読んでいるのかもよく分かった。」等の感想が得られた。1月には、その中のいくつかを市立図書館に掲示させていただいた。さらに2月には、放送委員が市立図書館に出向いて、図書館の紹介や図書館長へのインタビュー等を内容とした番組を制作した。放送委員は、事前の準備やリハーサルの段階から真剣に取り組み、意欲的に番組制作を行った。完成した番組は、全校で視聴し、市立図書館との関わりについて児童が認識を深める機会とした。

これらの取組の中で、児童は意欲的に読書をすすめた。その結果、市立図書館から貸し出された図書に限っても、読書数は半年間で、のべ約7千冊以上に達した。

③「徳」領域での取組

(ア) 児童の意欲付けと素地形成

児童が、日常生活の中で自主的にあいさつをしようとする意欲を高めるためには、相手から認められ、相手が喜んでいるということを子どもたち自身によく伝えることが重要であると考えた。そこで、地域の方々にあいさつ応援隊となっただき、あいさつの様子を伝えていただくことを計画した。

しかし、今年度は取組の初年度でもあるため、教職員が朝の交通指導時に児童の様子を観察し、あいさつ応援隊として活動した。登校時にあいさつがよくできていた児童について、伝えられた手紙を全校朝会で校長が紹介し、賞賛した。さらに、11月には

「よいあいさつについて」の研究授業・授業研究会を行う等、



【写真2 研究授業の様子】

児童の意欲付けと素地形成に取り組ん

だ。【写真2】

(イ) 児童を中心とした取組

本校では、集会委員会が学校週目標の立案・発表・振り返りを行っている。今年度は、適宜本校のすだち宣言の趣旨に則った週目標を立てて、それを朝会等で発表し、全校で取組及び振り返りを行ってきた。

また、11月のオリエンテーリングでは、よいあいさつを行うことを目標の一つに掲げた。1～6年生の小集団ごとに活動するため、事前に6年生が中心となり、あいさつの意識を高め合った。



児童は、【写真3 オリエンテーリングの様子】チェックポイントだけでなく、様々な場においてよくあいさつができていた。【写真3】

集会委員は阿波っすだちフォーラムの発表に向けて、1年間の取組を振り返り、児童自身の成果や課題を明らかにするとともに、自分たちでできる啓発活動の一つとして、よいあいさつを励行する紙芝居を作成し公開する等、取組をすすめた。

【写真4】



【写真4 集会委員作成によるあいさつ励行紙芝居の例】

④「体」領域での取組

(ア) 児童の取組と保護者・地域との連携

食育全般に関する全保護者を対象にしたアンケートを実施したところ、多くの保護者が、児童の食、特に好き嫌いについて高い関心を持っていることが明らかになった。そこで、好き嫌い克服のためのレシピを募り、それを広げることで学校と保護者、保護者相互の食育に関する情報交換を豊かにしたいと考えた。

9月から、保護者から寄せられた苦手克服レシピを保健だよりに掲載し、同時にレシピの募集も行った。一方、児童の意識を高めるために「給食ぱくぱくカード」【図3】

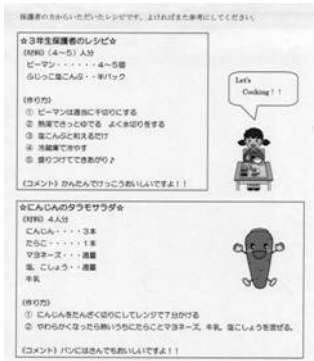
日	メニュー	得意	苦手克服	達成度
9月10日	月 20分以内で食べられるメニュー	肉類	肉類	◎
9月15日	火 20分以内で食べられるメニュー	肉類	肉類	◎
9月20日	水 20分以内で食べられるメニュー	肉類	肉類	◎
9月25日	木 20分以内で食べられるメニュー	肉類	肉類	◎
9月30日	金 20分以内で食べられるメニュー	肉類	肉類	◎

保護者のみなさん、子ども達も楽しんで食べてほしいです。
全家庭おいしかた。

【図3 給食ぱくぱくカードの例】

を作成し、一カ月のうち一週間、子ども自身が給食についての目標を定め、その都度振り返りを行った。給食ぱくぱくカードは、家庭との連携を図るため、週末に家庭に持ち帰り、家庭からもコメントを戴いた。その際、併せて

苦手克服レシピを募集したところ、保健だよりで一般的に呼びかけるよりもはるかに多くのレシピが寄せられた。寄せられたレシピは、次回の給食ぱくぱくカードに貼付し



【図4 保護者からのレシピの例】

て、全家庭に配布した。【図4】

10月のオープンスクールでは、児童・保護者と共に、市内中学校の栄養教諭から栄養バランスのとれた食事についての講話を聴いた。栄養教諭との対話も交えながらの講話の中で、児童は食と栄養について生き生きと学ぶことができていた。また、その後の栄養教諭と保護者との懇談会でも、活発な話し合いがなされた。11月には、学級ごとに、朝の活動時や給食時等を使って、市内小学校の栄養士や学校の調理員から、食育に関する自作の紙芝居をしていただいたり、給食を作っているときの願いや思いをうかがったりする機会を設けた。【写真5】

12月には、市内の栄養士を講師として、主に野菜が苦手な児童が対象として、親子料理教室を実施した。



【写真5 食育に関する紙芝居の様子】

【写真6】

教室では、普段殆ど野菜を食べることができない児童も、楽しみながら野菜を食べる意義を学んだり、作る過程から関わったりしたことで、全員がよく食べることでできていた。その際、保護者からは「(栄養士の)話を聞いて、野菜を食べることの重要性を認識した。」「今まで子どもと力を合わせて調理することがなかったので、調理は大変だったが、楽しく有意義だった。」等の感想が寄せられた。



【写真6 親子料理教室の様子】

(イ) 委員会を中心とした取組

保健・給食委員会では日常の活動に加えて、「給食ぱくぱく表」で給食を完食できたときに貼るシールのキャラクターを考え、それを配布した。

小松島市の名産である「竹ちくわ」にちなんでデザインされ「ちくボー」と名付けられた。【図5】



【図5 ちくボー】

委員会活動でデザインしたこともあり、ちくボーシールは児童に好評で、給食時の意欲も高められた。

1月の給食週間には給食集会を開き、児童自身が、小松島市の地場産物を自作のマップを使って紹介したり、給食の歴史、学校調理員の工夫や苦勞等の紹介をしたりした。



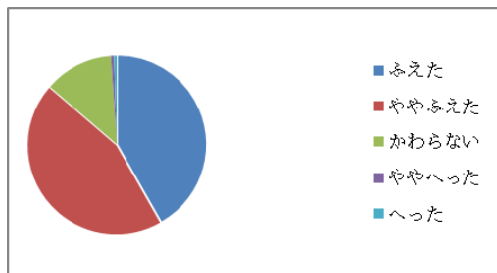
【写真7 給食集会の様子】

【写真7】

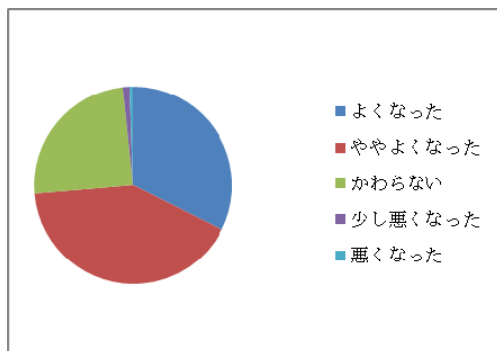
児童は生き生きと、意欲的に集会に参加することができていた。

(3) 成果について

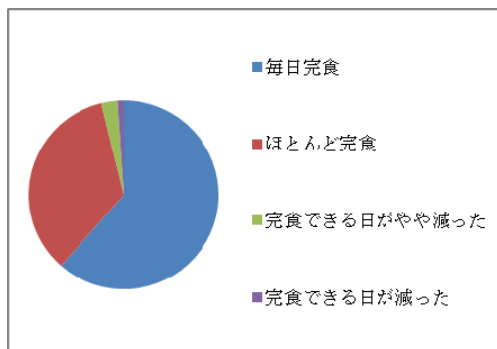
取組が進むにつれ、徐々に子どもたちの意欲や取り組む姿に変化が見られ始めた。また、2月末に行った、全児童を対象にしたアンケート結果では、「知」「徳」「体」いずれの面においても大多数の児童が向上したと認識していることが明らかになった。【グラフ2～4】



【グラフ2 お気に入りの本の数の変化】



【グラフ3 あいさつの様子】



【グラフ4 完食について】

「知」では、市立図書館からの貸出により、児童の読みたい本が増えた。その結果、全般に読書量が増えただけでなく、各教科等の単元と関連する図書を必要数揃えられたこともあり、よりよく読解力を高める学習を行うことができた。また、「スキスキカード」や「おすすめ本」の

作成・紹介や、読み聞かせ等を通して、達成感や意欲の高まりがみられた。

「徳」では、全般によりよいあいさつをしようとする意識が高まり、大きな声であいさつをする児童が増加した。また、集会委員会を中心に、児童が自主的によりよいあいさつをしようとする機運が高まり、啓発活動など、具体的な行動をとることも少しずつできてきた。

「体」では、完食の回数が顕著に増加しただけでなく、バランスよく食べようとする気持ちや、作ってくれた人に感謝しようとする気持ちが高まる等、食に関する意識にも高まりがみられている。

しかし、児童自身が自主的・自立的に取り組む面については、まだ十分とはいえない。また、地域との連携の面でも、より広く保護者・地域の方々の協力を得ることにより、あいさつ応援隊の活動を活発にする等、課題も残っている。

(4) 来年度以降の課題について

現在、平成23年度に向けての取組としては、次の通りである。

- ・「知」：学校図書室、市立図書館を利用した読書活動の一層の充実を図る。
- ・「徳」：あいさつ応援隊を保護者・地域に広げ、自主的にあいさつをしようとする意識を高める。
- ・「体」：給食を中心に食に関する意識を高め、進んで完食することをめざす。

今年度は取組の初年度ということもあり、当初は主に教師主体で進め、児童の意識を高める中で、少しずつ児童が自主的・主体的に関わり、活動できるよう取組を進めてきた。

次年度は今年度の経験を活かし、さらに、児童の自主的・主体的な取組が進められるよう、計画的、統合的に取組の輪を広げていきたい。そして、全校一致団結して、知・徳・体の調和のとれた自主的・自立的な児童の育成を図っていきたい。

取組事例②

「子ども・学校・家庭で取り組む 『すだち宣言』」 吉野川市立山瀬小学校

(1) 学校の状況について

本校は吉野川市の西部に位置し、校区は東西に4kmと細長い。南には四国山地の山並みが広がり、阿波富士（あわふじ）と呼ばれる高越山（こうつざん）が四季折々の美しい姿を見せている。北には、吉野川が流れ、自然環境に恵まれた地域である。また、忌部山古墳群をはじめとする古墳も多く点在し、古代から開けた肥沃な農村地帯である。これまでは、人口の流出も少なく地域住民の結びつきは深いものであった。しかし、近年、学校周辺にも住宅が建ち、校区外から転居してきた家庭が増えたり、少子化・核家族化が進んだりするなども影響し、人間関係の希薄化が進んでいる。

本校は、学級数14学級（特別支援学級3を含む）、児童数275名の中規模校で、「豊かな心を持ち、たくましく生きる力をもった子どもの育成」を教育目標にして取り組んでいる。子どもたちは何事にも真面目で、一生懸命に取り組むが、学力面では「知識」よりも「活用」の能力が低く、記憶よりも思考をとまなう力に課題がある。

学習状況調査からは、進んで学習に取り組んだり、30分以上読書をしたたりする子は半数以下である。あいさつは比較的よくできているが、習慣化するまでには至っていない。体力面は、徐々にではあるが低下傾向にあり、特に持久力と校外での運動量（社会体育を除く）に課題がある。

家庭・地域との連携については、PTA役員・各種委員会を中心にしてPTA活動が行われ、多くの家庭は学校教育に対して協力的である。また、毎年実施している山水会（高齢者クラブ）との交流

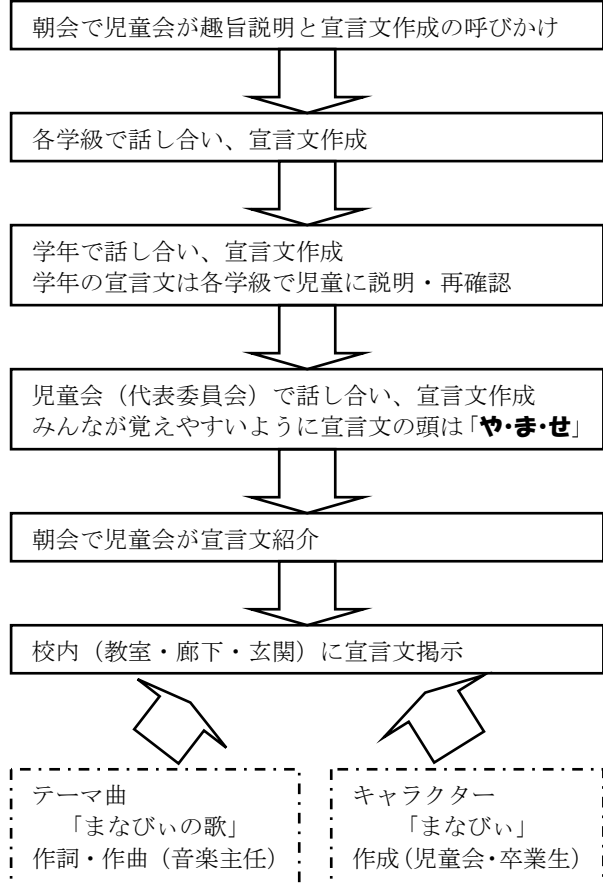
学習や農作物の栽培、毎日の交通立哨などを通じて、学校に対して様々な支援も送ってくれている。しかし、子ども自身の知・徳・体だけでなく、家庭・地域との連携、どの面においても二極化傾向があることは、否めない現実である。

平成19年には文部科学省「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」（2年間）、平成20年には文部科学省「豊かな体験活動推進事業」の研究指定を受けている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果等 を活用した取組について

阿波っ子すだち宣言の作成にあたり、知・徳・体の育成、家庭・地域との連携強化、どの面にもある二極化傾向の解消をめざして、子どもたちの自主性や自律性を大切にしながら、だれもが取り組むことのできる内容にした。一人の百歩より、百人の一步を大切にしていきたい。

①宣言文作成まで



山瀬版：阿波っ子すだち宣言

愛言葉

やろう すすんで かていがくしゅう 家庭学習を
 まず じぶん 自分から あいさつを
 せ てきよく 積極的に そとへ 外へ Go!



まなびい



②ファイル「まなびい」

児童会と教職員が話し合い、従来から取り組んできている山瀬版：「学習のきまり」「学問のススメ」「学習の心得」を基に、**ファイル「まなびい」**を作成した。全校児童が一人ずつファイルを持ち、毎日記録する内容になっている。6月1日からの実施に向けて、趣旨と記入例を示した文書を保護者に配布したり、授業参観後の懇談会や学校・学年だより、個人懇談等を活用したりして周知徹底に努めた。

めあては宣言文に合わせて「家庭学習」「あいさつ」「外遊び」の3項目である。具体的で少し頑張ればできそうなめあてを自分で決めたり、家の人と話し合ったりして決めている。めあては月ごとに見直し、自己反省したり、家の人や担任から評価をもらったりしている。

ファイル「まなびい」の記録は毎日、10日、月ごとのスモールステップで行い、「よく守れた◎」「だいたい守れた○」「守れなかった△」の三段階評価である。また、家庭学習の時間を毎日記録し、1か月の合計時間を算出するとともに、10日ごとに家の人と担任とから確認のサインももらっている。

さらに、児童会と教職員が話し合っって評価基準を決め、学期ごとに「まなびい賞」の表彰を児童会が行っている。

ファイル「まなびい」

1 めあてを決めよう。めあては、学期に「目標」を1つ。

①家庭学習のめあて めあて よく守れた◎ だいたい守れた○ 守れなかった△
 ②あいさつのめあて めあて よく守れた◎ だいたい守れた○ 守れなかった△
 ③外遊びのめあて めあて よく守れた◎ だいたい守れた○ 守れなかった△

2 「まなびい」に記録しよう。

- ①「家庭学習」「あいさつ」「外遊び」のめあてが、よく守れた人は◎、だいたい守れた人は○、守れなかった人は△、の既読をつけ。
- ②家庭学習の時間記録しよう。(★毎学年の人数、家の人に記入してもらおう)
- ③家の人と先生の人には、サインをもらう。
- ④出来たと「表彰賞」あいて「お褒め」のサインをしよう。

3 「まなびい」への記録

(10)月 家庭学習 合計時間(2400分) あしあと・ふりがえり

めあて	10日(計)	20日(計)	30日(計)	40日(計)	50日(計)	60日(計)	70日(計)	80日(計)	90日(計)	100日(計)	合計
家庭学習	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎ 300分
あいさつ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎ 600分
外遊び	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎ 600分
合計	1576.9	3153.8	4730.7	6307.6	7884.5	9461.4	11038.3	12615.2	14192.1	15769.0	15769.0

まなびい賞の表彰



③あいさつ運動

本校では、毎週金曜日の朝、児童会が中心になって玄関前や各教室であいさつ運動をしている。気持ちのよいあいさつができる人や積極的にあいさつ運動に参加している人を、児童会が毎週朝会で紹介している。



また、毎週金曜日の昼休みに児童会と3年生以上の各学級代表が集まって話し合う代表委員会では、あいさつを週のめあ

てに積極的に取り入れることを心がけている。

「あいさつ」の詩を校内に掲示したり、説話な

どをしたりして、教師自身もあいさつの励行に努めている。

最近、6年生からバトンタッチされて学校のリーダーとなった5年生が、毎朝玄関前であいさつをしたり、清掃活動をしたりするようになった。職員室のドアを開けて朝夕のあいさつをしていく子どもたちもいる。毎朝交通指導をしてくれている人や登下校中に出会う人たちに進んであいさつしたり、ファイル「まなびい」のあいさつのめあてを家庭でも実行したりするようになったという、うれしい評価も届いている。



④持久力を高める

本年度はファイル「まなびい」の外遊びを活用して、持久力を高めることに取り組んできた。持久力を高めるためには、毎日の継続した取組が最も大切である。

そこで、歩いて登下校することをファイル「まなびい」に積極的に取り入れた

り、本年度、県内すべての5・6年生に配布された万歩計を使って具体的な数字をファイル「まなびい」に記録していったりした。

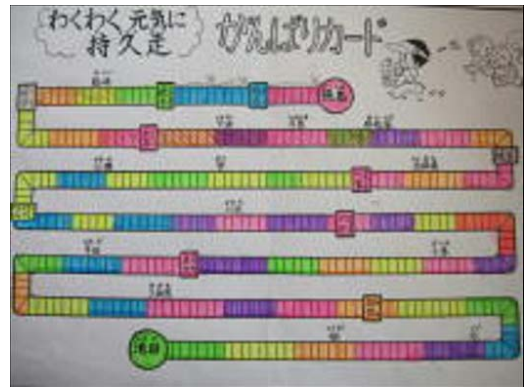
従来から使われている「体力アップ百日作戦」（1～4年）や「なわとびがんばりカード」・「持久走がんばりカード」（全学年）を継続的な活用に切り替えた。また、持久走記録会（12月16日）に向けて、11月30日から12月15日の業間休みに全校児童で持久走に取り組んだ。



なわとびがんばりカード

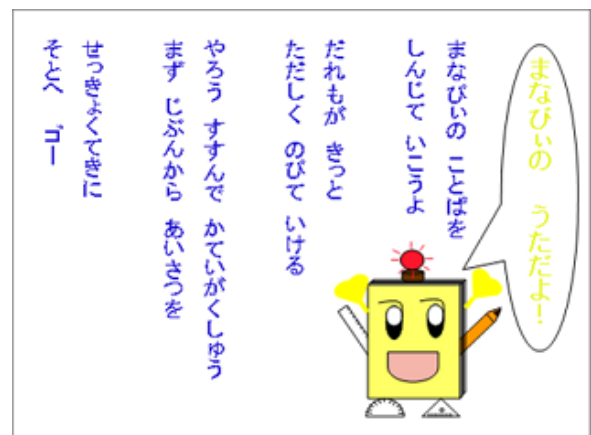


持久走がんばりカード



⑤まなびいの歌

11月30日の人権集会（学習発表会）で、児童会が阿波っ子すだち宣言やまなびいについて説明したり、まなびいの歌を歌ったりして、再度、家庭に取組の協力を呼びかけた。また、まなびいの歌は朝の活動時に折にふれて歌われ、朝のスタートに大きな活力を与えてくれる。休み時間や遊びのなかでも口ずさむ子がいて、子どもたちに広く深く親しまれているといえる。



(1) 成果について

①山瀬版：阿波っ子すだち宣言

96%の児童が宣言文を知っていると回答している。宣言文の頭を学校名の「**やま・せ**」としたことや、オリジナルのキャラクター・歌を作ったことによって、だれもが覚えやすく親しみやすいものとなった。宣言文を実行しようという意欲にもつながり、非常に効果的で、二極化傾向はない。さらに高いめあてに向かってどのように展開していくかが課題である。

②まなびいの取組

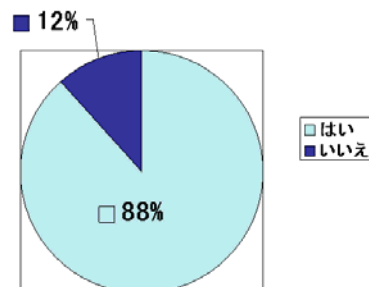
82%の児童がまなびいを忘れずに記録していると回答している。また、自分で記録しているのは73%、家の人と一緒に記録しているのは18%、家の人だけが記録しているのは9%であり、児童の自律性や家庭の協力が表れている。記録に家の人がかかわっている割合は1年生が一番高く84%である。これは、子どもの発達段階から考えて当然のことである。記録方法としては学校と家庭の二方法であるが、登校直後や朝の活動、朝の会で記録している学級ほど、記録率は高い。(まなびいタイムを特設している学級もある。)

以前より進んで家庭学習をするようになったのは88%、あいさつは90%、外で体を動かす機会は87%と、まなびいに取り組むことによって、子どもたちの自律性は高められている。毎日記録することや、児童・保護者・教師が相互に言葉を掛け合うことは、自分のめあてを実行しようと頑張る意欲付けになるとともに、成長の過程を振り返りやすくしている。しかし、自己評価の個人差が児童にも保護者にも見られたり、少数ではあるが協力が得られなかったりする家庭もある。また、ファイル「まなびい」を点検・記入してその日のうちに返すことが担任の負担にもなっている。ファイル「まなびい」の内容を再検討し、より効果的・効率的なものにしていかなければならない。

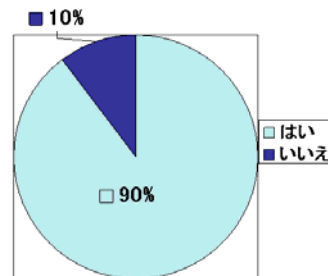
まなびい賞の表彰については、子ども

たちの意欲や保護者の関心につながっているが、自己評価の個人差によって評価しづらいところもあるので、評価基準の再検討の必要がある。

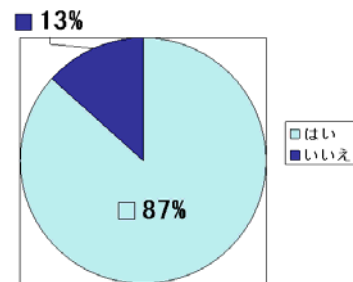
「まなびい」に取り組むことによって、以前より家庭学習をするようになりましたか？



「まなびい」に取り組むことによって、以前より進んであいさつをするようになりましたか？



「まなびい」に取り組むことによって、以前より外で体を動かす機会が増えましたか？



③家庭・地域との連携

夕食後、親子で一緒に歩くようになったり、まなびいチェックをしていくなかで、親子のコミュニケーションが図られたりするようになったという家庭もある。送り迎えの車の数も減少してきている。

まなびいの取組が、担任と保護者、担任と子どもの共通理解の一助にはなっているが、十分とはいえない。この1年間の取組を土台にして、家庭・地域へとその連携をさらに広げていきたい。

(4) 来年度以降の課題について

①山瀬版：阿波っ子すだち宣言

子どもの実態にあった適切な宣言文を作ることができ子どもにも教師にもよく浸透しているが、家庭への浸透や実践との結びつきが弱い。学校・家庭・地域で実際に子どもたちが行っていることと宣言内容とのつながりをKJ法などを使って、子どもと教師、保護者で再確認し、個々の実践計画図を作成して取り組んでいくのも一つの方法である。

②ファイル「まなびい」

ファイル「まなびい」の取組は、児童の自律性や家庭との連携を高めた。しかし、二極化傾向は依然としてあり、ファイル「まなびい」の内容を再検討しなければならない。「まなびい賞」についても同様である。学期に1回程度は進捗状況のチェック等を全校で行う機会を設定することも必要である。また、学級に「まなびい係」（仮称）を作り様々な取組の例を紹介したり、教師も参考になる例を積極的に取り上げたりして発信していくことが大切である。

③家庭・地域との連携

家庭・地域との連携を課題として教職員が再度共通理解し、ファイル「まなびい」の取組を発信していくことが重要である。そのためには学校・学年だより、ホームページ、学校行事・集会等をより積極的に活用するとともに、既存の関係組織（山水会等）との連携をさらに強める必要がある。

取組事例③

「～めざせ学力向上 阿波っ子すだち宣言の実践から～」 小松島市立江中学校

(1) 学校の状況について

本校は、周りを山や田に囲まれた自然豊かな静かな環境の中にある、生徒数が85名の小規模の学校である。生徒は全体として、素直で真面目で努力家である。

大部分の生徒は、学校の規則をよく守り、家庭学習の習慣をきちんと身につけている。しかし、おとなしい生徒が多く、主体的に行動することに苦手意識が見られる。そこで、本校では学校教育目標である「自主・協同・勉学に則り、人権を尊重し望ましい校風を継承し、創造に努める感性豊かな生徒の育成を目指す」に基づき、生徒たちの意欲と行動力を高め、国際化や情報化に対応できる積極的な生徒、少子高齢化やグローバル化などに対応できる生徒の育成に向けた取組を行っている。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

全国学力・学習状況調査では、国語A・Bともに正答率は徳島県・全国と似ており、全体的にはおおむね良好と考えられる。しかし、読み取った内容を条件にあった表現に直して書くことや、話すことに対しては苦手意識がある。数学科では、文字式の意味を問われる問題や、記述して答える問題の正答率が下がっており、文字式の意味の理解や、自分の考えた道筋を伝えることに課題が見られる。また、〔生徒質問紙〕の中で「国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとめりとともに内容を理解しながら読んでいますか」という質問に対して、読んでいると答えている割合が、全国より7ポイント、県より6ポイント低い。「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりするのは難しいと思いま

すか」という質問に対しても、難しいと感じている生徒が全国より4ポイント低い結果となっている。そこで今後は、書く能力や話す能力をさらに身につけさせる指導が必要である。自分の考えをまとめ、伝える力をつけるための指導を充実していくこと、つまり活用する力や読解力を身につけさせること、問題解決的な学習や発表場面を多く取り入れ、発言力や表現力を身につけさせることが重要である。また、行動面でも〔生徒質問紙〕の「難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦していますか」に対して、当てはまると答えた生徒は、県より20ポイント、全国より25ポイントも低い結果となっている。

これらの課題の改善を目指して、生徒自身が目標を立て実現に向けて取り組むために、また、学力向上の基盤となる、知・徳・体の調和のとれた生徒の育成をすすめるために、生徒自らが「宣言」を作成し、それに基づく実践を行った。「宣言」は次の3つである。

- 目標をもって、毎日かかさず読書と学習をします。（知）
- 立中から、あいさつで笑顔と元気を届けます。（徳）
- 規則正しい生活をして、体力の向上に努めます。（体）

この「宣言」に基づく具体的な取組として、「知」では、まず読書冊数の増加を目指した。目標数を1年間に1人30冊、全校で3000冊とした。読書において、多読賞や充実賞を設けた。また、自主学習ノートや漢字学習ノートについてもノートのコンクールを実施したりして、生徒のやる気を出させる工夫をした。



「徳」ではあいさつ運動を行い、元気よくあいさつ運動をする習慣を身につけたり、立江川周辺の清掃作業に参加するなど、ボランティア活動への積極的な参加を推進した。親切な行いのあった生徒の表彰をしたり、体験活動でお世話になった施設へ、感謝の気持ちを込めて育てたパンジーの配布活動を行ったりした。

「体」では体力向上のために、朝練への全校生徒参加を呼びかけたり、規則正しい生活が送れているかを「生活反省チェックカード」等を使いチェックした。これらを通して、健康でたくましい身体づくりを進めた。

(3) 成果について

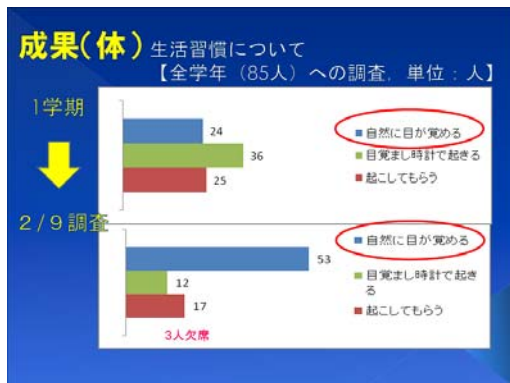
自主的・自律的で、知・徳・体の調和のとれた生徒の育成を目指した「宣言」に具体的に取り組んでみての状況を知るため、全校生徒85名にアンケートを実施した。

「知」では、自主学習ノートについての項目が特に良かった。約85%の生徒が、毎日・ほぼ毎日提出した。ノートコンクールを実施したことにより、ノートの書き方に工夫を凝らしていた。また、目標を持って取り組んでいる生徒も30名もいた。読書に関しては、目標冊数を達成した生徒は4割程度で、さらに取り組む必要がある。

「徳」では、あいさつができるようになった生徒が52名もいる。このことは、今まであいさつが十分でなかったということでもある。立江川周辺の清掃活動には1・2年生の9割が参加し、ボランティア活動に取り組んだ。さらに親切な行いのあった生徒の表彰などの取組を通して、友達の良いところを見つけられるようになり、自分の言動を見直すことができるようになった、感謝の気持ちをもてるようになったなど、よりよく人とかわろうとする態度が見られるようになった。

「体」では、約7割の生徒が毎日・ほ

ぼ毎日朝練に参加している。また、参加している生徒のうちほとんどの生徒が、体力が向上したと感じている。規則正しい生活を7月のアンケートと比較してみると、朝、自然に目が覚める生徒が24名から53名に増えた。また、朝食については、7月には、食べないことが多い・食べないという生徒がいなくなった。



これらのことから、成果として次のようにまとめることができる。

- ノートの書き方を工夫したり、目標を持って学習に取り組むなど、自主学習の習慣が定着しつつある。
- あいさつの励行やボランティアへの参加を通して、少しずつ積極性が出てきた。お互いの良さを認め合える友達関係を考えるようになった。
- 基本的な生活習慣が身につくようになった。体力が向上し、各種スポーツ大会でも活躍することができた。

このような取組の結果、12月に行われた徳島県学力ステップアップテストでは、活用を問う問題の正答率に伸びが見られた。国語科では、大問が3問に対して2問、小問にすると8問中5問が県の正答率の平均をかなり上回っている。書く能力や話す能力を問う問題も、県の平均より3ポイントから7ポイント高い。数学科でも、大問が3問に対して2問、小問にすると9問中5問が県の平均をかなり上回っており、中には正答率が30ポイント上回っている問題もある。これらのことから、活用する力、読解力において着実に力をつけていると考えられる。

「宣言」の取組から、課題として次のようなことが上げられる。

- 読書冊数の目標を達成できる生徒を増加するための方策。
- 教師から指示されたことはきちんとできるが、さらに生徒が学習やスポーツ等に自主的・自発的に取り組むための方策。
- 友達の良さに気づくことはできるようになったが、困っている友達に積極的に声をかける等、自ら行動するための方策。

本校生徒がさらに学力向上を目指すためには、読書冊数を増やすことと、もともと課題であった自主性・自発性・積極性をさらに身につけることが重要であると考える。

(4) 来年度以降の課題について

学校では、何といたっても授業が重要である。そこで、本校生徒の課題である活用する力や読解力をさらに高めるために、授業改善に取り組むたい。

国語科では、自分の考えをまとめ、伝える力をつけるための作文指導を充実させる。生徒が興味を持てるような問題解決学習を展開したり、生徒の発表の機会を増やす工夫を取り入れて、発言力や表現力が身につくような授業づくりをする。数学科では、文字式が表している意味を授業の中で常に意識させるとともに、発表することや書くことによって自分の考えを表現し、周りの生徒たちに伝えていくような授業の展開を目指す。

他教科においても、筋道を立てて考え、自分の考えをわかりやすく説明したり、表現したりする能力を育成する必要がある。そこで、すべての教科において、自ら課題を見つけ課題を解決していく過程で、根拠を明らかにしながら論述したり、資料にまとめて発表したりするなどの場面を取り入れて、言語活動の充実を図りたいと考える。

さらに、読書冊数を増やすための方策

を考えたい。今年度、全校生徒が読書に取り組んでいる時間は、月曜日の6時間目と木曜日の朝の活動の時間である。この時間をさらに増やすことを考えたい。また、読み終わった本について感想を記録する読書記録シートなどの点検を、定期的に行うようにする。さらに家庭との連携を深めることにより、家庭での読書時間の増加を目指したい。

学力との相関関係が明らかになっている生活面や行動面においても、きめ細かい取組を行い学力向上を目指す。「生活記録」や「生活反省チェックカード」などを利用し、毎日の生活を振り返りながら基本的な生活習慣が身につくように指導していく。体験学習や自然体験遠足など、さまざまな行事の機会をとらえ、自分の良さに気づかせ、自信を持って主体的に活動する場を作っていく。学校生活のあらゆる機会をとらえて、保護者や地域に情報を発信するなど、保護者や地域と常に連携を図ることで、協力が得られるようにする、などの取組である。

今回、この研究に取り組むことにより、あらためて本校の課題を確認すること、さらに次年度の目標を考えることもできた。また、「宣言」の作成・計画・実践・発表などを通して、生徒自身も自分たちの課題を知り、その解決のために、多少なりとも自分たちで行動すること、そして自分たちがこれから目指す目標も持つことができたと思う。このような研究の機会を与えてくださったことに感謝するとともに、これを機会にさらに研修を重ね、自主性・自発性・積極性を身につけた生徒の育成を目指して、一段と前進していきたいと考えている。

取組事例④

「チーム北島」

～生徒一人ひとりが

主役となるために～

北島町立北島中学校

(1) 学校の状況について

北島中学校では、「勤勉」「至誠」「健康」を校訓に、生徒一人ひとりが主役となって、学校の目標であるチーム北島「(き)希望」「(た)たくましく」「(じ)自信」「(ま)まわりとの絆」を心の糧に「知」「徳」「体」のバランスの取れた人間性豊かな生徒の育成に取り組んでいる。

(2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

北島中学校では、全国学力・学習状況調査の結果として、学校に持っていくものを前日か、その日に確かめている生徒、身の回りのことは、できるだけ自分でしている生徒、学校の規則を守っている生徒、人が困っているときは、進んで助けている生徒、近所の人に会った時は、あいさつをしている生徒、また、いじめはどんな理由があってもいけないことだと答える生徒が少ないという課題が明らかになり、その課題解決のために、次のような「阿波っ子すだち宣言」を制定した。

- 自己をみつめ、生き生きと自己を表現し、学習活動に意欲的に取り組みます。
- 語り合いの学習を通して、共感と連帯の絆に結ばれた人間関係を築きます。
- 笑顔いっぱいの挨拶を交わし、奉仕の精神を培い、環境問題に取り組みます。

この宣言の土台であり、最も大切にしていることは、「語り合いの学習」を通して結ぶ「人と人との絆」である。自分の思いや願いを自分の言葉で表現することで、生徒一人ひとりのコミュニケーション能力は高まり、生徒相互の中に深い絆が培われていく。その絆が教科学習や

人権学習、生徒会が核になって取り組んでいる「あいさつ運動」や「校内美化の奉仕活動」「ゴミの減量化」等の環境問題への取組を活性化させているのである。



(3) 成果について

「自主的・自律的で知・徳・体の調和のとれた生徒の育成」を目指し取り組んできた2010年度北島中学校3年生の取組を、具体的な実践事例を通して紹介する。

①自己を語り合う学級開きの参観授業

真壁仁の詩「峠」に寄せて、「これまでの自分」と「これからの自分」をみつめ、自己の生き方を語り合う参観授業から「語り合いの学習」はスタートする。この語り合いの学習の成果が、それぞれの学級の雰囲気豊かなものとしていき、知・徳・体の調和の取れた生徒の育成の土台となっている。

②生徒の人間性を磨く職業体験学習

生徒一人ひとりの人間性を磨いている職業体験学習の成果は大きなものがある。その職業体験での学びを作文と短歌に表現し、学年全体で体験発表会を実施している。特に、老人養護施設での体験学習は、生徒一人ひとりの中に大変大きなものを残している。それは、生徒一人ひとりが、生きることの意味、家族の存在、そして、「ありがとう」の言葉の重さと大切さを噛みしめた短歌に、その学びが切々と表現されている。

苦しげに たんをつまらせ 座ってる
何も言わずに どこかを見てる

ある人の 部屋の中には 二つだけ
湿った布団と 家族の写真

おばあさん 口をもごもご 何言うの
耳を澄ませば ありがとう

③生徒一人ひとりの表現力を高める合唱コンクール

北中生の最高の舞台として、北島町創世ホールで実施している合唱コンクールは、それぞれのクラスが、学級目標を土台に作成した学級旗に込めた思いや願いを紹介し、とっておきの課題曲2曲と、学級の人間関係やクラスの「今」を表現したオリジナルの学級歌を披露している。この体験は、生徒一人ひとりの表現力を高め、舞台に立つことの誇りやよろこびを育てている。それは生徒一人ひとりが作成した短歌に表現されている。

考えに 考え抜いた この歌詞を
みんなで歌えば クラス一つに

歌声が ホールに響く 学級歌
その思い出は いつも心に

学級歌 こみ上げてくる この思い
みんなで創った 感動の舞台

④人間としての生き方を語り合う人権学習

「阿波っ子すだち宣言」の柱であり、一人ひとりの生徒に最も大きな影響を与えている「語り合いの人権学習」は、北島町創世ホールにて、マイクを回しながら自分の思いや願いを語り合う形で行ってきた。

1年生の4月よりこのような形で「語り合いの人権学習」を実施することにより、生徒一人ひとりのコミュニケーション能力は見違える程磨かれていく。

また、この「語り合いの人権学習」の他にも、特別にゲストを招いて実施した全体学習があり、その学習から生徒たちは、大切なことを学び続けている。

本年度の6月には、ハンセン病回復者で、在日韓国人である金泰九さんを岡山県長島愛生園からお迎えし、学校全体で一人ひとりが自分を表現する「語り合いの人権学習」を実施した。講師の金泰九

さんは、生き生きと自分を語る北島中学生の姿が眩しかったと言われる。それは、生徒一人ひとりが、本気で自分自身を表現したからであり、会場全体を温かい雰囲気包み込んでいった生徒の語りは、いつまでも仲間の中に生き続けている。

当日の発言内容のいくつかを紹介する。

「将来、マスコミ関係の仕事に就きたいと思っています。この仕事は、世の中の動きを変えることができる重要な仕事だと思います。自分の書いた記事を通して、金泰九さんのように、間違っただことは間違っていると世の中に伝えていきたいからです。夢を実現させるために今という時間を大切に、一生懸命に勉強して、必ずマスコミの仕事に就きたいと思っています。」

「私は将来医療に携わる仕事に就きたいと思っています。そして、ハンセン病のような病気の人を一人でも多く助けられる人になりたいです。今日、金泰九さんに会って、差別の苦しみとか、悲しみをリアルに知ることができたし、私の中でも、差別という厳しいものに対する考えが大きく変わりました。金さんと出会ったことを心から感謝しています。」

「僕は今、陸上部に所属しています。僕たち陸上部には夢があって、それは、11月にある県中学校駅伝で優勝して、全国中学校駅伝でベスト8に入るという夢です。この夢を叶えるのは大変だけど、金さんが様々な差別の壁を乗り越えてこられたように、これからの練習をしっかりと頑張ってその夢を叶えられるようにしたいと思います。今日、金さんと出会って、金さんはとても笑顔が素敵な方だなと思いました。自分も金さんのような笑顔のステキな人になりたいと思います。」

マイクを握り、600名近くの全校生徒の前で、一人ひとりの思いや願いを語る発言が、全校生徒の中に広がっていき、生徒一人ひとりの自尊感情と規範意識を高めていく。

特に、金泰九さんに、県駅伝優勝と、

全国ベスト8を宣言し、その宣言通りに「県駅伝優勝」と、宣言以上の「全国3位の栄冠」を勝ち取った陸上部の姿は、北島中学生の誇りとなっている。

金泰九さんに学ぶ全校全体学習



自己をみつめ、生き生きと自己を表現することで、夢や目標を持ち、学習活動に意欲的に取り組む生徒が増え、「授業がわかりやすい」と答えた当学年（3年生）の生徒は（昨年74.3%から今年76.9%）に改善した。また、当学年が牽引役となり、語り合いの学習を通して、共感と連帯の絆に結ばれた仲間作りをするなかで「学校では友達の意見を聞き合い、自分の思いを語り合っている」（昨年70.5%から今年73.6%）、「先生や友達と、お互いのことを思いやった言葉でつながっている」（昨年74.1%から今年75.8%）、「いじめ・暴力は許さず、好ましい友人関係を作っている」（昨年79.0%から今年85.4%）と学校全体に改善の傾向が見られた。

（4）来年度以降の課題について

本年度11月、北島中学校での「語り合いの人権学習」の集大成として、中学時代に取り組んだ「語り合いの人権学習」から培われた絆を誇りとして、地域社会の中で活動を続けている青年を招いて

「語り合いの人権学習」を実施した。

当日、話をしてくださった講師の中には、農業経営者として鳴門金時の栽培に取り組んでいる方や、小学校の先生として山間僻地の小学校に勤務している方、製薬会社や印刷会社等の企業で、職場でのさまざまな問題を克服しながら頑張っている方がおり、働くことの意味や生きることの意味、学ぶことの意味を深く考える時間となった。

この学びの中で、これまで生徒会を中心に学校をあげて取り組んできた「あいさつ運動」や「校内美化奉仕活動」、「ゴミ減量化運動」等の環境問題への取組を社会の一員として主体的に取り組んでいく意義を深く追求することができ、これからの北島中学校の歩むべき方向が明確に示されていくことになった。

現在の北島中学校は、駅伝全国第3位の陸上部や、テニス部の早朝練習に取り組む仲間を中心に、爽やかな笑顔であいさつが飛び交う活気のある学校となり、学校全体が生き生きと躍動している。それは、生徒一人ひとりが大切に取り組んできた「あいさつ運動」の大きな成果である。しかし、奉仕活動やゴミの減量化の取組には、まだまだたくさんの課題がある。

この成果と課題を新生徒会が、立派にリーダーシップをとり、全校生徒の一人ひとりが、学校の主役となって、自分に何ができるかを問いかけ、実践し、この「阿波っ子すだち宣言」の取組をより大きく前進させていきたい。



徳島新聞 平成23年1月12日朝刊



徳島新聞 平成22年12月20日朝刊